# 研究者と巡るセメント美術

美術史研究者　坂口英伸

## No.10　佛子泰夫

俊朝寺（東京都港区、曹洞宗）の家柄に生まれた佛子（ぶつし）泰夫（１９１６－１９９２）は、住職としてその衣鉢を継ぐ一方で、彫刻家として数々の作品を制作した異色の彫刻家である。佛子というその苗字から、仏像を手掛けたのかと思いきやそうではなく、写実をもとに理想化を加えた裸婦像を得意とした。佛子は仏師ではなかったのだ。佛子が東京美術学校彫刻科を卒業した１９４０（昭和１５）年、同校に日本ポルトランドセメント同業会からの寄付金により「臨時セメント美術教室」が設置され、セメントを美術素材として積極的に活用していく教育が試みられた。佛子は同教室で学んではいないものの、戦後になるとセメント彫刻を積極的に発表し、小野田セメント株式会社（当時）が協賛したセメント彫刻による野外彫刻展の常連作家でもあった。ユニークな彫刻家である佛子に興味を抱いた筆者は、その作品を実見すべく、用賀駅（東急電鉄田園都市線）で降り、用賀プロムナードに赴いた。

用賀プロムナードは用賀駅北口と世田谷美術館（砧公園に所在）を結ぶ約 1.6km の遊歩道で、建築家集団である「象設計集団」（１９７１年結成）が手掛けた（１９８６年竣工）。用賀プロムナードは別名を「いらかみち」といい、「瓦の屋根」を意味する甍（いらか）にふさわしく、歩道は淡路瓦による舗装がなされ、加えてベンチ・街灯・オブジェ・樹銘板・縁石などに至るまで淡路瓦が用いられている。瓦が有する柔らかなテクスチャーや味わい深い表情などを視覚的に楽しむことができる素敵な遊歩道、それが用賀プロムナードである。

佛子による《しらべ》は、「環八」（東京都道３１１号環状八号線）に近い街路樹の茂みの中にポツンと置かれていた（図１）。本作は弦楽器（おそらくウクレレ）を奏でる若い女性像で、文字どおり「しらべ（旋律）」が聞こえてきそうな印象を醸し出している。像高は 160cm ほどだろうか、その胸元には誰かが首にかけたであろう金属製のペンダントが光っていた。女性は左足に体重をかけたコントラポストのポーズをとり、視線をやや斜め上に投げかけて、優雅な佇まいをみせる。台座には英語の筆記体で「Ｙ．Ｂｕｓｓｈｉ」とサインが刻印されていた。本作は小野田セメント株式会社が協賛した１９６６（昭和４１）年の野外彫刻展に出品された作品である。佛子は同展覧会に１９５０年代前半から１９６０年代後半にかけて継続的に作品を出品していた実績を持つ。

用賀プロムナードの《しらべ》は、小野田セメントが世田谷区へ寄贈したと筆者は推測する。この類推の根拠となるのが福岡県北九州市門司区に存在する《しらべ》である（図２）。恒見区民会館（門司区）に現存しているこの《しらべ》は、小野田セメント恒見工場が１９６６（昭和４１）年に北九州市に寄贈したものである。同社は彫刻から作品を買い上げたり、全国各地にセメント彫刻を寄贈したりする活動を展開していた。こうした事実に鑑みて、用賀プロムナードの《しらべ》は、世田谷区による彫刻を利用したまちづくりの一環として、小野田セメントから同区へ寄贈された可能性が高い。

筆者はこれまでに佛子の作品を何度か目にしている。東京都内では芝公園で《伸びゆく子供》を、神代植物公園ではバラ園に置かれた《萌芽》を、岩手県の住田町保健福祉センターでは《少女》をそれぞれ実見した。筆者の調査では、このほかにも山口県や大阪府などで作品を確認できる。僧職としての生活と彫刻家として芸術活動との両立が大変だっただろうことは想像に難くない。筆者は穏やかな作風のなかに佛子の静謐な精神を感じた。

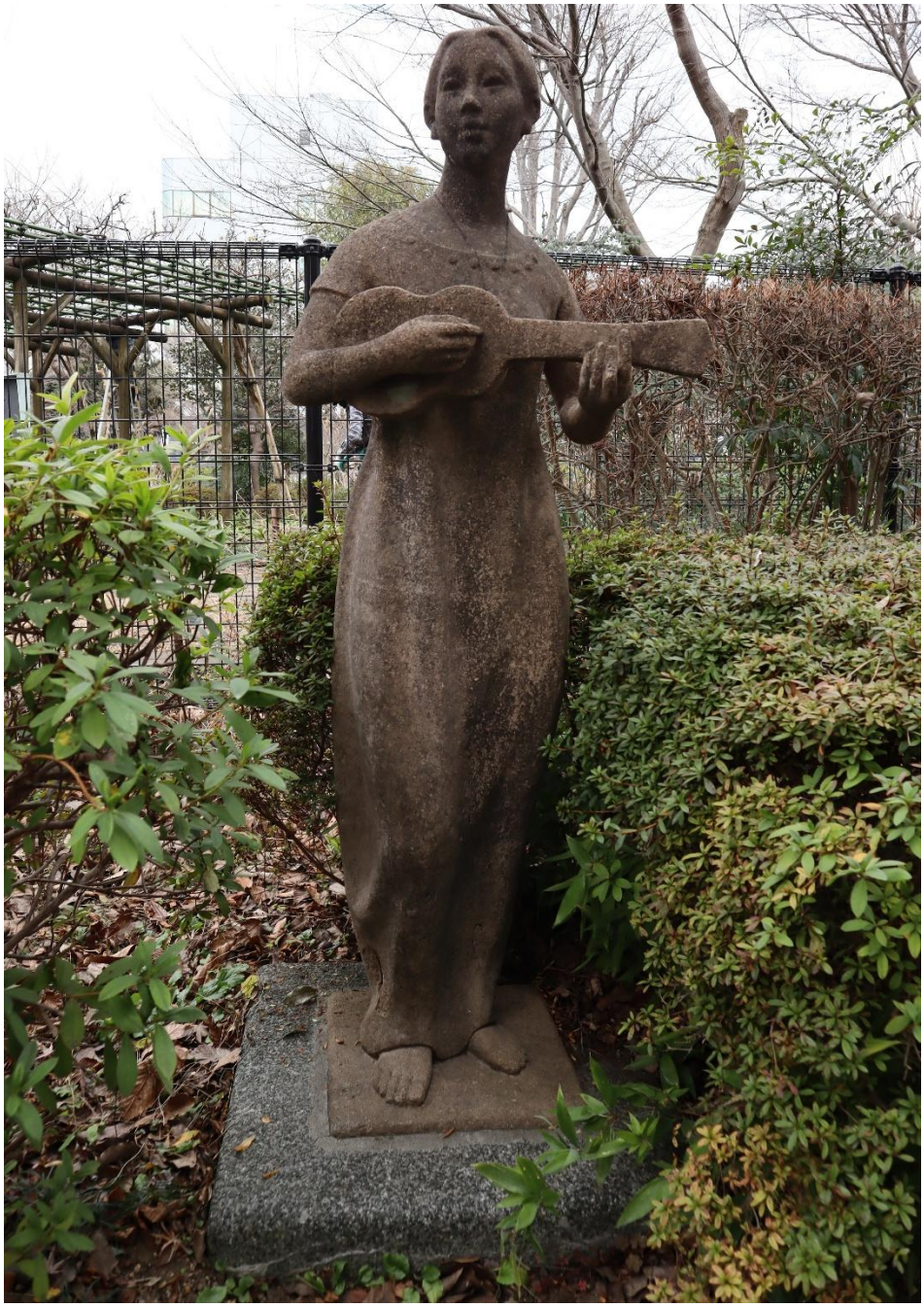

図１　佛子泰夫《しらべ》（東京都）

図２　佛子泰夫《しらべ》（北九州市）

画像データ提供：太平洋セメント株式会社